

令和 4 年 5 月 31 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00622

研究課題名(和文)南北朝・室町時代初中期口語の記述的研究

研究課題名(英文) Descriptive study of colloquialism in the early and middle of the Nambokucho and Muromachi periods

研究代表者

山本 真吾 (YAMAMOTO, SHINGO)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：70210531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本語史研究の中で停滞していた、南北朝から室町時代初中期にかけての言語の諸現象についての記述的研究に着手した。口語を認定するためには、これに対立する文語規範の究明があり、双方向的な研究が望まれる。口語資料の有力な文献として『太平記』を取り上げ、特に米沢図書館蔵本の原本調査に従事し、その言語事象の観察を行った。一方の文語資料としては、平安時代の訓点語を軸として、各時代ごとの語彙データベースを作成した。また、室町時代の漢語を取り上げ、文語性、口語性を測定する試みを検討し、その成果の一端は中国、韓国での国際学会で発表した。その他、高山寺、東寺等の実地調査を行い、この時代書写の原資料を発掘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語の口語と文語が分かれてゆく過程の解明は、困難ではあるが重要な課題である。中世末期になって口語を記録した文献が出現するが、その時点ですでにかなり文語との距たりが大きいことが知られる。どのような過程を経て、このような距たりが形成されるに至ったかを解明するためには、南北朝から室町時代初中期の言語実態を精密に観察する以外に手段はない。本課題はこれに取り組んだものであり、学術的意義はこの点にある。このような口語と文語の二途に分岐する過程を解明することは、現代日本語における口語と文語のあるべき姿を見通すうえでも有意義であり、この点に社会的意義を認めることができる。

研究成果の概要(英文)：I embarked on a descriptive study of various linguistic phenomena from the Nambokucho to the early and middle Muromachi period, which had been stagnant in the study of Japanese history. In order to recognize colloquialism, there is an investigation of literary norms that conflict with this, and interactive research is desired. He took up "Taiheiki" as a leading document of colloquial materials, and was particularly engaged in the original survey of the books in the Yonezawa Library, and observed the linguistic events. On the other hand, as a literary material, we created a vocabulary database for each era, centering on the lessons learned from the Heian period. He also took up the Chinese language of the Muromachi period, examined attempts to measure literary and colloquialism, and presented some of the results at international conferences in China and South Korea. In addition, we conducted a field survey of Kosanji Temple, Toji Temple, etc.

研究分野：日本語史

キーワード：言文二途 文語 口語 太平記 日本語史研究資料

1. 研究開始当初の背景

日本語史の分野において、「平安鎌倉時代」と「室町時代」の日本語を対象として、これを書名、論文題目に冠する著述は多数認められ、平安時代から中世にかけての言語記述は時代的に途切れることなく進められているかのように見られる。しかし、多くの「室町時代」と冠する研究業績は、16世紀末の末期の口語文献に基づくものであり、両者をつなぐ、南北朝時代から室町時代初中期の言語を研究する志向性の乏しいことに気づかれた。南北朝時代は、文体史のみならず、アクセント史の上でも重要な転換期とされるが、この南北朝時代から室町時代末期に至る流れは、文法、語彙、文字・表記、音韻、文体のいずれも、その輪郭さえ描かれていないのが現状である。昨今の通史的研究の実状は、その前後の時代の記述的研究を無批判に繋げているに過ぎない。これが、本研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、院政鎌倉時代語(12～14世紀初)と室町時代末期語(16世紀末)のそれぞれの記述的研究の(不連続)を解消させることを目指すものであり、ここに学術的独自性を訴えるものである。研究代表者は、日本語史研究のための文献資料の基盤整備に30年余り従事してきたことがあり、文献資料の扱いや問題点を実際に認識する機会に恵まれてきた。この経験に加えて、共同研究の機会を通じて、隣接分野で、新領域の、写本学(codicologie)やコーパス研究の成果について学ぶ機会があり、この手法を本研究に取り入れることによって可能となる方法を提示し、実践するところに創造性が認められる。

3. 研究の方法

本研究は、4カ年かけて実施し、2の目的を達成するために、以下のような方法を採用することとした。

- (1) 南北朝、室町時代初中期において書写された文献資料を寺院経蔵に求めて広く探索し、実際に原本調査を実施し、口語的徴証が得られる可能性の高い文献資料を収集・整理する。
- (2) 『太平記』をこの時代の示準文献の1つと想定し、言語年代という観点から諸本の整理を進め、古写本の实地調査を行う。
- (3) 『太平記』の言語事象の記述を行う。特に、漢文訓読語の口語化、漢語の日常化といった観点から分析を行う。
- (4) 『平家物語』諸本についても、この時期の言語を反映していると見られる古写本がある。諸本の語彙の異同を調査し、当該時代の言語資料として活用できる文献を見出す。
- (5) 口語現象の位置付けに際しては、時代毎の文語規範のあり方にも留意して、相対化をはかりながら記述する。文語規範の基準として、まず平安時代訓点資料の言語を据えるが、平安時代の初期・中期と後期・院政期とでは内実が異なっている可能性があるためその点にも留意しながら作業を進める。

上記(1)については、コロナ感染防止対応という不測の事態が生じたため、課題が採択された時点で計画していた寺院経蔵の实地調査に厳しい制限がかかり、2020年度以降ほぼ実施できない状況に陥った。次項の研究成果においては、その制約のなかで遂行できたところに基づくものである。

4. 研究成果

(1) 『平家物語』の語彙 延慶本と長門本の異同

(『平家物語』の語彙)というとき、今日一般によく読まれており、早くに索引も刊行された覚一本に拠る場合と、古態説の有力視される延慶本に拠る場合とでは、語彙の諸相も自ずと異なるものになるであろう。さらに、この延慶本(応永書写)でも長門本との共通本文とそうでない箇所とでは本文の性質が異なる

っており、そこに使用される語彙の様相もこれを反映することになる。いま、両者の語彙がどの程度異なるかについて、たとえば、語頭「な」で始まる自立語語彙を対照させてみると、次のようである。

延慶本語頭「な」で始まる語彙総数は 566 語、長門本語頭「な」で始まる語彙総数は 579 語である。その内訳は以下の通りである。

ア、延慶本・長門本共通語彙...382 語

イ、延慶本独自語彙(長門本に無い語彙)...184 語

(例)ないり(泥梨)、ながめ(眺)、ながれやる(流遣)、なきがら(亡骸)、なげきおもふ(嘆思)、なげまるばす(投伏)、なぞらふ(準)、なつかしさ(懐)、なほし(直)、なみまくら(波枕)、なめなめにす、ならはし(習)、ならべたつ(並立)

ウ、長門本独自語彙(延慶本に無い語彙)...197 語

(例)ながめある(眺居)、ながれくだる(流下)、なぎざぎは(渚際)、なげききく(嘆聞)、なげつく(投付)、なぞふ(準)、なつく(懐)、なまかうべ(生頭)、なまし(生)、なめて、ならはす(習)、ならべつくる(並作)、なんもん(難問)

延慶本の語彙のうち、長門本との共通語彙は 67.5%、独自語彙は 32.5%であり、長門本のそれは、延慶本との共通語彙が 66.0%、独自語彙が 34.0%となり、おおよそ 3 分の 2 程度を共通語彙が占めていることになるが、残り 3 分の 1 はそれぞれの独自語彙であって、親近性の高い両者の間にもかなりの違いがあることを知られるのである。この相違の特徴についてはなお全体を詳しく調べてみなければ明確なことは言いがたいが、複合動詞に顕著な差が見られるようである。

(2) 市立米沢図書館所蔵『太平記』の書写

市立米沢図書館所蔵の『太平記』は、甲類本の巻 26・27 を三分割している点において乙類本に属しているが、巻 22 を欠巻としている点において甲類本の性格も有しているテキストである。整理番号「善 198」40 冊 41 巻(22 巻欠)。内田智雄『米沢善本の研究と課題』((臨川書店、1988 年)、小秋元段『米沢本『太平記』の位置と性格』(『軍記と語り物』28、1992 年 3 月)、長坂成行『伝存太平記写本総覧』(和泉書院、2008 年)等に拠れば、本文献は、漢字片仮名交じり文で、室町時代末期写とされる。

巻 5 とそれ以降とでは、1 面の行数が 9、10 行と異なっていることや、数名の筆になることが説かれていたが、それ以上のことは知られていない。

今回、2019 年 3 月、12 月、本書の原本調査に従事したところ、以下のことが明らかになった。

内題に記載された「巻」の字体には、A～D の 4 種認められる。この 4 種によって巻ごとに整理すれば、

A 群 巻 1～5

B 群 巻 6～15、18～24(但し 22 巻は欠)、26、29～35、39～41

C 群 巻 16、17、25、27、28

D 群 巻 36～38

となるが、この字体の特徴を共有する各群では、「セ」「リ」「レ」の片仮名字体もそれぞれの字体を共有していることが明らかになった。

これによって、おおよそ本書の筆録者は 4 名であったと認められる。

なお、B 群、C 群、D 群の筆は、訓点も同じそれぞれ同筆である。A 群の訓点には二種の筆が認められるがそのうち 1 つは C 群の筆と同じと認められる。B 群には別筆の訓点に加えられるが、方言、音訛形と思しき語も混入しているようである。

なお、本書の成立事情について、「古文真宝後集抄」(善 139)が本書と同じ体裁の表紙であり、両書との比較も今後の課題である。

(3) 『平家物語』『太平記』の漢語の口語化

(1) で見たように、同じ『平家物語』でも諸本によって使用語彙は異なる。ここでは、漢語を例に見てみよう。語頭「い」の漢語を例として抽出すると、次のように整理できる。

延慶本に使用される漢語 = 432 語

(漢語サ変動詞、漢語形容動詞、漢語複合名詞は採り、混種語は除外。)

○いうあい(幽埃)上 537、いうえつたり(幽咽)上 156、いうき(憂喜)上 51、いうきよ(幽居)上 348、いうくつ(遊岨)上 552、いうけん(幽賢)下 36、いうこく(憂国)上 556 他 1 例など。

この 432 語のうち、長門本にも使用される、延慶本・長門本共通の漢語は、250 語である。

長門本にも使用される共通漢語 = 250 語 (名詞→漢語サ変 1 語、名詞→漢語形容動詞 1 語を含む) : 57.9% (250 / 432)

たとえば次のようなものがある。

○いういたり(幽々)上 186 他 2 例、いういたり(悠々)下 7 、いうえつず(幽咽)上 313 、いうし(遊子)上 175 他 2 例、いうしよ(由緒)上 364 他 7 例、いうちやうなり(優長)下 12 、など。

さらに、本文の成立が 14 世紀後半に下る覚一本について見てみよう。この延慶本・長門本の共通漢語に一致するものは、118 語を数える。

覚一本に使用される漢語 = 118 語 : 47.2% (118 / 250)

この、とは重ならない、覚一本に使用される漢語には、たとえば次のようなものが該当する。

○いうかん(幽閑)上 342 、いうぎ(幽儀)上 303 他 1 例、いうくん(遊君)上 162 他 3 例、いうし(猶子)上 64 他 4 例、いうしよく(有識・有職)下 416 他 2 例、いうす(宥)上 112 など。

このように、『平家物語』に使用される漢語についても、諸本によって異なりが大きく、延慶本を軸とした場合、長門本と共通する漢語はおよそ 6 割、その共通する漢語のうち、覚一本と一致するものは、その 5 割弱ということになる。

さて、今度は、上記の結果と『太平記』とを比べてみよう。

『平家物語』延慶本、長門本、覚一本に見える「幽」字を冠する漢語を取り出し、これと『太平記』に使用される漢語を比較してみると、『平家物語』に使用されない漢語に、次のものがあることが知られる。

幽暗、幽隱、幽艶、幽溪、幽谷、幽魂亡靈、幽趣、幽邃、幽栖、幽棲、幽閉ス、幽陵
幽揚ス...13 語

たとえば、「幽隱」は、次のように使われる。

・高野山憂世ノ夢モ覚ヌベシソノ暁ヲ松ノ嵐ニ、ト読テ、暫シ八閑居幽隱ノ人トゾ成タリケル(巻第 29、大系本 = 慶長 8 年古活字本、p.138)

このように、『太平記』の漢語の特色を浮かび上がらせ、ここからも南北朝時代の漢語使用の実態を垣間見ることができるかと思う。

さらに『太平記』の口語的漢語として「一定」に注目してみたい。次の例のように、漢語でありながら、会話表現中に出現している。なお、この語は『南北朝遺文』にも使用例が見いだせる。

・「大塔宮、明日十津河ヲ御出有テ、小原へ御通リアランズルガ、一定道ニテ難ニ逢ハセ給ヌ覚ルゾ、志ヲ存ゼン人ハ急ギ御迎ニ参レ」(巻第 5、p.179)

・吉野ニテハ、一定掠申事も候つらんと被推量候、(法眼宣宗書状案写、興国 2 年 5 月 25 日『南北朝遺文』関東篇 2、1221)

この作業を通して、今後『南北朝遺文』にも目を向けることの有意性に気づくことができた。

(4) 『太平記』における禅用語の受容

時代別国語大辞典(室町時代編)全五巻中、「禅宗」で用いるという解説を施す漢語語彙は、172 語を数える。そのうち、『太平記』に用いられている語彙は異なりで 42 語を数える。

○あこ(下火)、いんも(恁麼)、えはつ(衣鉢)、がうこ(江湖)、かつとう(葛藤)、かんきん(看經)、きがん(起龍)、くふう(工夫)、ごぶん(御分)、たんぐわ(旦過)、てうさん(朝参)、てつぎう(鉄牛)、てんじん(点心)、てんちゃ(奠茶)、はうほつ(髣髴)、はうぢやう(方丈)、もんじん(問尋)、をしやう(和尚)など

佐藤喜代治「中世の漢語についての一考察」(『国語学』84、1971)では、このような禅宗・朱子学等を通して流入した中国近世の語が、近代における日本語の語彙の発達を考える上で重要であることを指摘し、中国における宋代以降の言語変化を考慮すべきことを説いて、「同じ中世と言ひながらも、古代に近い様相をもつ鎌倉時代と、近代の序幕となる南北朝時代以後とは一応区別して考へるべきものであらう。」と結んでいる。幕末明治時代における漢語研究の著しい進展に比して、この南北朝時代の漢語研究はなお停滞気味であると言えよう。

この南北朝時代を漢語受容史の画期と認める主張は、本研究課題のテーマに密接に繋がるものと考えられる。

(5) 鎌倉時代の説話・軍記物から室町時代抄物へ

これまで研究代表者は、平安時代の訓点資料に見える「訓点語(形)」と、鎌倉時代の説話集、軍記物に使用された当該語の意味用法を比較、検討し、位相の異なりといった観点からの説明を試みてきた。

平安時代の訓点語が、鎌倉時代の和漢混淆文にどのように用いられるか、さらに、下って室町時代の抄物にどのように受け継がれるか(受け継がれないか)の問題について、ここで考えてみたい。これまで調査した語について、抄物ではどのような意味で用いられているかを調べてみて、さらに新たな意味用法を獲得したように見られる語を以下に紹介したい。

おぎろ: 上代語が訓読に用いられ平安時代には理解語彙として継承。鎌倉時代に法会の場合を介して表現語彙として再生し、さまざまな意味用法を派生。

度はずれて勇猛なさまにいう。

・ヲギロトハケナゲダテヲスル者ノコト也(『太平記聞書』廿二)

調子よく、事実以上に誇張したことを言うこと。

・夸 八世界ヲギロ云テ、ソラウデコク者ゾ。夸ハ誇ト同ゾ、ウデコイテ、大功ヲナイテ(『黄鳥鉢鈔』七)

きらぶ: 上代以来の男性語。上代語が訓読に用いられ、平安時代には理解語彙として継承する中で意味用法を拡げる。鎌倉時代の軍記などに表現語彙として使用。

対象がいやで、それを避けたいと思う。

・妻ガ夫ヲキラウテ、ニゲツナソドシテハ、ナントシテ子ヲバマウケウゾ(『史記抄』四)

・王充道八大酒飲デ有ルホドニ、茶ヲバ嫌ハウズガ、クレタホドニ戯ゾ(『山谷詩集鈔』十六)

良くないことだとして、忌避する。

・孔子ノ以テノ外キラワレタルコトゾ。惚別人ノ悪事ヲ云コトハ、仏説ニモキライ、儒家ニモキラウコトゾ(『三略抄』四)

ささぶ: 漢文訓読の場で、保つ・持ちこたえる の意味に「さぶ」の意味が加わって 妨げる の意味が生じた。これに「まうす」が後接し複合動詞「ささへまうす」ができるが、この語は 抗弁する・反論する 意でもっぱら用いられ、文書用語としての用法を獲得した。またその一方で、歌評用語としては 言葉の続き具合がなめらかでない 意味で用いられた。

人をおとしいれようと、ありもしないことをでっちあげて目上の人に告げる。

・賢人ヲササエテ流ツコロシツシタモノハ、ワザハイガ子孫三代マデ及ゾ(『三略捷抄』)

このように、鎌倉時代までの和漢混交文における訓点語の意味用法と、室町時代末期以降の抄物のそれとで異なりが見られる事例を観察することで、この間の南北朝、室町時代初、中期の言語の様相に迫る糸口が見出されるように思う。

引用文献 上の記載内容(1)～(5)の元になった研究文献・発表資料を示す。さらに本記載に先行する引用文献等は、以下の文献を参照されたい。

(1) 山本真吾「『平家物語』の語彙」(『中世の語彙 武士と和漢混淆時代』、朝倉書店、2019年)

(2) 山本真吾「2019年度市立米沢図書館蔵『太平記』原本調査書」(2019年3月・12月、未発表)

(3) 山本真吾「日本漢語史における中世 南北朝・室町時代初期の漢語の諸問題」(第11回中日対照言語学シンポジウム、西安外国語大学: 中華人民共和国、2019年8月24日)発表資料

(4) 山本真吾「日本語における漢語受容の歴史とその展開」(知識人文學国際学術大会・口訣學會国際学術大會、檀国大学校: 大韓民国、2020年2月12日)発表資料

(5) 山本真吾「訓点語と中世日本語 説話・軍記物から抄物へ」(2021年第60回口訣學會夏期全国学術大會: 大韓民国、口訣學會、清州古印刷博物館、2021年8月11日)発表資料

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山本真吾	4. 巻 117
2. 論文標題 平安鎌倉時代における「きらぎらし」の意味用法と位相－訓点語と歌評用語－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京女子大学日本文学	6. 最初と最後の頁 5-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本真吾	4. 巻 0
2. 論文標題 高山寺蔵南北朝・室町時代初中期写本目録稿（一）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 令和2年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本真吾	4. 巻 226
2. 論文標題 「訓点特有語形」と和漢混淆文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 全国大学国語国文学会『文学・語学』	6. 最初と最後の頁 120 - 131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本真吾	4. 巻 3
2. 論文標題 『平家物語』の語彙	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『中世の語彙 武士と和漢混淆時代』	6. 最初と最後の頁 2 - 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本真吾	4. 巻 97-3
2. 論文標題 『今昔物語集』の動詞「すぎる」- 欠字・仮名書自立語・漢字表記のゆれをめぐる-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国語と国文学』	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/3549366	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本真吾	4. 巻 0
2. 論文標題 平安鎌倉時代における「こひねがふ」の意味用法と位相- 訓点語及び記録語と歌評用語-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部日本・日本語学研究論集	6. 最初と最後の頁 443-462
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本真吾	4. 巻 0
2. 論文標題 高山寺蔵南北朝・室町時代初中期写本目録稿(二)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和3年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 2件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 山本真吾
2. 発表標題 日本漢語史における中世 南北朝・室町時代初期の漢語の諸問題
3. 学会等名 第11回中日対照言語学シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本真吾
2. 発表標題 日本語における漢語受容の歴史とその展開
3. 学会等名 知識人文學國際學術大會・口訣學會國際學術大會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本真吾
2. 発表標題 Ganmon Liturgies in Premodern East Asia ; keynote lecture
3. 学会等名 Workshop（米国：コロンビア大学）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本真吾
2. 発表標題 訓点語と中世日本語 説話、軍記物から抄物へー
3. 学会等名 口訣學會夏期全國學術大會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山本真吾	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 624
3. 書名 歴史言語学の射程	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------